talk! talk! talk! 建築家・北山恒さん

建築家

北山恒さん

建築を学び始めた学生時代、建築感覚を身につけるトレーニングとしてカメラを撮り始めたという建築家・北山恒さん。実際の建築現場ではカメラは必需品であり、さらに建築写真というメディアで建築とカメラの関わりは深いという。今回は、建築と写真の関わりという点からじっくりとお話をうかがった。

プロフィール

きたやま・こう。1950年、香川県生まれ。1976年、横浜国立大学建築学科卒業。1978年、ワークショップを共同主宰という形で設立する。1980年、横浜国立大学大学院修士課程修了、1987年に横浜国立大学専任講師となる。その後、1995年に同大学助教授となり、同年ワークショップを解散し、architecture WORKSHOPを設立する。現在、横浜国立大学教授、日本女子大学非常勤講師。日本を代表する建築家として活躍を続けている。
これまでの主な受賞歴に、「HOUSE IN HOUSE」で1996年東京建築士会住宅建築賞、「白石第二小学校」で1997年第17回建築学会東北建築賞作品賞、第38回建築業協会賞、1998年日本建築学会作品選奨。「Z-House」で2001年東京建築士会住宅建築賞受賞、「公立刈田綜合病院」で2003年グッドデザイン賞、医療福祉建築賞、2004年東北建築賞、日本建築学会作品選奨など。
その他最近の仕事に、六本木一丁目駅出入口、東京タワーの特別展望台のリニューアル「TOKYO TOWER RENOVATION」、北青山に建つテナントビル「T.C」などを手がけている。

一眼レフカメラを向けることが 空間感覚を磨くトレーニングになった

今回は建築と写真の関わりについてお話をうかがえればと思います。

はい。まず建築を学び始める学生に向って、僕は写真を撮りなさいと言うんです。それはね、建築を学ぶ上でのトレーニングになるからなんですよ。
大学に入ったばかりの学生は、当然建築について何も知らない素人です。彼らにはまず、建築を作らせる前に建築のよき理解者になることを教えます。たとえばいい音楽家は、同時にいいリスナーだと思うんです。いい音がどんなものかを理解していて、それがヒアリングできるようにならないといい音を作れません。音感の優れた人は町に溢れる音を採譜できるそうです。それと同じように、空間をトレーニングした人は、どんな空間でもその空間を読み取れる空間感覚というものがあります。まずはそれを磨いていく必要があるんです。そのトレーニングのひとつとして、写真を撮るということが役に立つんです。

空間感覚というのは、具体的にどのようなものなのでしょうか？

たとえば町を歩いていて、ふとここは気持ちがいいなと感じる場所がある。落ち着く、居心地がいい、そういう所です。空間感覚がいい人というのは、その感覚を分析的に見ることができる人です。この建物のデザイン、流れる音、光の加減、一緒にいる人、いろいろな要素があってその場所をいいと感じているわけですが、その感覚を漠然と感じるだけではなく、注意深く観察して見なければいけないんです。

撮影：chiyoda corp 2002年
「TOKYO TOWER RENOVATION」
最近の手掛けた仕事のひとつ。
東京タワーの大々的なリニューアルが行われ、
地上250mにある特別展望台を担当した

そして、注意深く見るための道具として写真を撮りなさいと言っていたんです。特に僕は一眼レフカメラを買いなさいと言っていました。今はデジタルカメラの時代になりましたが、10年くらい前までは、高いけれどコンパクトカメラではなく一眼レフカメラを勧めていました。フィルムを入れて、1枚1枚無駄にしないように、ゆっくりと自分で構図を決めて風景を切り取る。それが大事なんです。

写真を撮ることで、注意深く物を見る訓練になりそうですね。

ええ、そういうことです。僕も建築の学生になって初めて一眼レフを持つようになったんです。それから写真を撮ることに一所懸命になりました。
ですが今はデジタルカメラが主流になって、写真を撮る意味は少し変わって来たんです。僕の学生の頃みたいに1枚1枚構図や露出を決めてピントを合わせて、丁寧に撮っていくことはなくなった。その代わり、ひとつの被写体を好きなだけバシバシ撮ることができる。少し時間を置いて時間の経過と光の様子を観察することもできるようになった。どちらのカメラの使い方がいいのかはわかりません。ただ、時代に合わせて建築も変化してきていますから、記録するものも、時代に合わせて変化させていかなければならないとは思っています。

時代に合わせて勉強方法も変わっているんですね。

撮った写真をさらにパソコンで加工するといった技術も今の学生は学んでゆかなければいけませんしね。そういう使い方をするには、デジタルカメラは大変便利ですね。
実際の現場でも、デジタルカメラを使う機会が格段に多くなりました。今やカメラは感性を磨くものではなく、記録やメモという感覚になりました。レンズを通して風景を注意深く見るというあの感覚は、今の時代ではもう持てないでしょうね。ですが周りの変化に合わせて、違う世界に飛び込んでいくしかないんでしょうね。

カメラ片手に世界中の建築巡り 偶然写した貴重な写真でフォトグラファーデビュー！？

学生時代にはどんなカメラを使っていたのですか？

ニコマートです。ほんとはニコンFに憧れていたんだけど、学生には手が出せなくて（笑）。

その頃はどんなものを撮っていたんですか？

身近な風景の中から素敵な場所を探して撮ったり、有名な建築家の建築を見て回って撮っていました。東京だけでもいい建築がたくさんありましたからね。トレーニングのためにといろいろ歩き回りました。
大人になると、今度は世界中の有名な建築を見て回りました。かなり真剣に撮っていましたよ。海外に行くと特に、自分のためと

いうよりは人に見せるために、伝えるために撮っていました。それに1枚1枚じっくりフレームの四隅まで注意を払って撮っていましたから、その頃の写真は自分でも上手いなと思ったりします（笑）。注意深く撮っているなと。

その頃の写真、ぜひ拝見してみたいです。

いいですよ。そういえば、その頃の写真で思い出深いものがあるんです。リベラという建築家の作ったイタリアのカプリ島にある"ヴィラ・マラパルテ"という建築を見に行ったとき、偶然室内に入ることができて、その写真を撮ったんです。帰国後、たまたまブルータスの編集者にその写真を見せたら、これはなかなか見ることのできない貴重な写真だって言われて、その写真を買い取ってくれたんです。その写真のおかげで、イタリアまでの往復の旅費分がまるまる返ってきた（笑）。僕が唯一、写真で稼いだ仕事ですよ。

その写真がこれですね。室内には偶然入ることができたとおっしゃっていましたが。

たまたまアーティストがそこを借りて中で何かやっていたんです。それで、日本から来た建築家なんですが見せてもらえないかと行ったら中に入れてくれたんです。
"ヴィラ・マラパルテ"のインテリアの写真を持っている人は、今でもあまりいないみたいですね。だから僕がその写真を持っていると聞きつけて、今でも貸してくれと問い合わせが来ることがありますよ。

建築の模型を撮ることも多々あると聞いたことがあります。

ええ、建築模型はいろいろな角度から撮影するんです。模型の撮影は建築の学生はもちろん建築の現場でも必要ですね。
僕も学生の頃はニコマートでいろいろ工夫しながら撮っていましたよ。ライティング機材がないので屋外で撮るんです。でも直射日光はダメだから曇りの日に屋上に持っていって、トレーシングペーパーを壁のようにバックに敷いてホリゾント代わりにしたり。結局は学生の模型ですから、出来上がりはどうってことないんですよ（笑）。でも一眼レフカメラを使って、ちゃんと手間をかけて撮影しているっていうことが大事だったんです。真似ごとでも、プロフェッショナルだという感覚を持って撮る。コンパクトカメラとは違うんだぞっていうね。

そもそも、建築の模型を作って写真に撮るというのはどんな意味合いがあるのですか？

模型にもいろいろあって、設計の初期の段階でコンセプトを決定づけるためのものもあれば、最終的に建てるものを1/50くらいで正確に作るものもあります。建てる前に、その模型を見ながら検討していくわけですが、テーブルの上に乗る大きさのものですから、上からの目線ではひとつの物として見てしまう。そうすると、模型というイメージが先行してしまって、実際のスケール感がつかみにくいんです。そこでクローズアップさせながら、実際の目線に合わせて写真を撮る。写真という媒体に落としてあげることでスケール感がリアルに実感できるんです。実際に建てた後に同じ角度から同じように撮影すると、ほぼ同じような写真ができるんですよ。

コンピューターが発達した今でも模型は必要なんですね。

もちろんコンピューターを使って三次元で見ることはできます。ですが、実際に手で触れる物体としてそこにあるという方が信頼できるんです。写真に撮って検討して、違ったらまた変えていって写真を撮るという作業は絶対に必要です。何枚も撮れるデジタルカメラでその作業が手軽にできるようになったのは、本当に助かっています。

イタリアのカプリ島にある"ヴィラ・マラパルテ"。
ゴダールの映画「軽蔑」のロケ地として世界的に有名になった。海に突き出た崖に建っており、水平な屋上へと続く大階段が特徴的

室内の様子。内装を撮った写真はあまり見られないとのことで、貴重な写真となった

この頃は写真に夢中で、構図や露出などこだわって撮っていたという。窓の景色と室内のコントラストが印象的な1枚

現在進行中だというプロジェクト、渋谷にできる映画館の模型。こちらが全体像

人の目線のアングルで入り口の様子を撮ったもの。
実際に建物に入る人の目には、このように映るのであろう

建築写真の善し悪しによって 建築家の評価が決まることもある

建築と写真の関係のひとつに、「建築写真」というジャンルがあると思います。ひとつ疑問なのが、建築雑誌に載っている写真を見ただけで、その建築を評価してもよいのかということです。写真として優れているとしても、それが実際に建築として優れているのとは別なのではないかと思うのですが。

たしかにその通りです。写真を見て素晴らしくても、実際に行ってみたら何だこれはっていう建築は結構あります。20世紀に入ってからは特に、フォトジェニックな建築、ようするに写真に写ってかっこいい建築がもてはやされるようになりました。
それが建築をダメにする可能性は十分にあるんです。建築というのは身体がそこに入って形成されるものです。でもビジュアルとしていい建築が雑誌に載って有名になることで、建築家たちはそういうものを作ろうとするようになりました。建築はいい写真を追求するのではなく、いい空間を作るものです。でも、写真によって建築のその大事な部分が欠けてしまった。そういう意味で、僕は20世紀の建築は一度ダメになってしまったと思っています。

20世紀は、写真で完結してしまう建築が多く建ったということでしょうか。

ええ、特に20世紀後半は、写真でOK、実際に行かなくてもいいという建築が大量に作られた時代だったと思います。ですがこれからまた、実際にそこに行って身体を入れてみないとわからない建築に価値が出てくると思います。やっぱりその場に行かないとダメなんだという。

フォトグラファーの側に立つと、実際の建築よりも写真が魅力的だというのは評価にあたいしますよね。

撮影：阿野太一　2003年
「T.C（La Chiara表参道）」
北山さんの仕事は、
フォトグラファー阿野太一さんに
頼むことが多いとか。
「彼は僕も予想しなかった、
思いがけない場所を
見つけて撮ってくれる。
それがいい建築写真家だと思います」

実際の建築はどうあれ、そこへ行ってみたいと思わせる写真が撮れるならば、それは腕がいいフォトグラファーでしょうね。以前、オランダのミュージアムの写真を撮ったフォトグラファーがいて、その写真が素晴らしかったんです。撮った本人からもこれは実際に見に行かないとダメだと言われて、駅からさらにタクシーを乗り継いで行くような遠い所までわざわざ見にいったんですよ。でも行ってみたら、5分もしないうちに、「さて帰ろうか」って（笑）。ようするにそのフォトグラファーは、自分の撮った写真がいかに価値があるかということを言いたかったんでしょうね。

建築家としては、そのように建築の良さ以上に撮ってもらうのがいいのでしょうか、それともありのままを伝えてもらいたいものなのでしょうか。

それはやはり、そのもの以上に撮ってもらったほうが嬉しいですよ。
矛盾しているようですが、結局、建築というのは写真のメディアに乗って評価されるものなんです。すごくかっこいい写真が撮れても変な写真が撮れても、その写真を通して、これが私の作った建築だと世界中に発信されるんです。実際の空間がどうというのではなく、写真の善し悪しで建築家の評価が決まってくるんです。実力は写真で評価される、今はそういう時代なんです。でも、それはひとつの事実としてある世界で、その世界を否定する必要もないし、それはそれでいいと思っています。

実際に建築を体感したい人は出かけて行けばいい、という。

そうそう。建築というのは体感する部分と、写真などの2次元のメディアで見る部分の両方の側面を持っているんですね。
建築は誰でも、世界中の人がその空間に入って感じることができます。そういう意味では共通言語として誰にでも公平で、ユニバーサルなものだと思っています。だから、世界中の人がこの空間を体験したいと思ってくれるような写真を撮ることも重要なんです。

建築は主役ではない 使う人が主役になれる最高の舞台を作ることが仕事

設計をするときに重要なことはなんですか？

現実的なことを言うと、お金を出すクライアントにしっかりと説明をして、納得していただけたものを作っていかなければいけません。今の日本で手に入る材料と、出来る技術、そういうものを把握しながら、いつもクライアントに説明できるように、いつも理屈を考えて設計を進めていくことが重要です。

理屈ですか。

理屈です。この材料は値段がいくらかかって強度はこれくらい、だけどこれをこの空間に使うとこんないいことがあるからどうですかという、そういう説明ができるかどうか。説明できないことはやってはいけないんです。

建築家の欲求を自由に反映できるものではないんですね。

できませんよ。だって建築家はアーティストではありませんから。アーティストは自分の欲求を満たすために自由に作品を作りますが、建築家はそうはいきません。クライアントだけでなく社会に対しても説明しないといけないんです。建築はこの地球の地面の上に建てるものです。建ってしまえばいやおうなしに社会に公開されてしまうんです。だから、社会性を忘れてはいけないし、社会の枠組みの中で作っているんだということを自覚しないといけません。ただきれいなものを作りたいとか、目立つものを作りたいではダメなんです。

では、建築家の喜びとはどのようなところにあるのでしょうか？

舞台に立つアクター、アクトレスが主役だとしたら、僕たちはその舞台を作ることが仕事だと思っています。舞台が目立ってもしょうがないんです。それよりも使いやすいもの、演じる人が演じやすいものを作ることが喜びなんですね。生活する人が生活しやすいとか、ここにいてよかったなと思えるようなものが作れたら、それがプロとして最高の仕事なんです。

たとえば住宅は、住む人がクライアントであり主役になるんですね。

そうです。家はお住まいになる方のものですから。主役の要求をできる限り形にしていくのが役目です。

公共の建物に関しては、誰がクライアントになるのですか？

公共物によっては、発注者と監理する人が違ってきます。たとえば学校だったら文部省が発注して、学校の先生が建築に注文をつけたり、病院だったら発注は地方自治体で、お医者さんが意見を言う場合もあります。
ただ、一番大事なのは、この場合主役になるのは発注者でも意見をする人でも管理する人でもないんです。学校だったら生徒たち、病院だったら患者さんが主役になるんです。発注者の言うことを聞いていれば、一番スムーズに設計は進むでしょう。でも主役の立場に立って設計を進めると、発注者とは対立してしまう場合が多くなります。ですがそこで対立してでも、主役のため、生徒や患者のための空間を考え抜かないといけません。それが建築家にとって、忘れてはいけない大事な部分だと思います。

使う人の想像力を沸き立たせるような 自由な空間を作っていきたい

僕は汎用性のある建築を作ろうと考えています。人間は知らず知らず空間からいろいろな制御、コントロールを受けています。そのコントロールをどうすればいいかと考えたときに、もっと自由な感覚を持ってもらえたらと思うんです。たとえば、こう生活してくださいというのではなく、生活は自分で自由に組み立てていいんだというような、ユーザーに想像力を沸き立たせるような空間を作っていきたいんです。そしてやはり最終的には、自由で、そしてここにいてよかったと思える、そういう空間を作りたいんです。

建築ではそれをどう表現していくのでしょうか？

たとえば僕は授業でよく、前に立って話すのを止めるんです。教卓から降りて、途中から後ろに立って授業をするんです。学生は大体、前に座るのを嫌って後ろに逃げるように座るでしょ（笑）。それは、教室とは先生が前に立つ空間だという意識を植え付けられてきたからなんですね。ところが僕が後ろに行くと、その空間はガラっと変わってしまう。僕は生徒に、教室は前に先生が立

って聞くと決まっているわけではない、こうやって空間は自由に変わっていくし、それによってそこにいる人に新しい関係性を提案することができるんだと言うんです。

進行中プロジェクト、映画館の建設現場写真。
施工途中の写真はデジタルカメラで撮り管理する。
毎回膨大な枚数になるという

それからもし、裁判所を円卓にして、裁判官、検事、弁護士、被告が対等に並んでいたらどうなるでしょうか。裁判の形、関係性がまったく変わってくるでしょうね。それによって裁判の概念事体が変わるかもしれない。

なるほど。建築によって、固定観念を取りのぞいたり、新しい関係性を生み出したりすることができるんですね。

はい。最近戦争の映像をよく目にするんですが、一番不幸なことは、自分の生死が自分とはまったく関係のないところで決められてしまうことだと思うんです。自分の命だけでなく、自分がどう生きるのか、どう努力していくのかを自分で決められて、そしてその努力の結果がちゃんと報われるような社会でなければいけません。そういうあたりまえのことを建築や空間で表現していきたいんです。

では最後に、今後作ってみたい、作っていきたい建築があれば教えてください。

人が集団で活動する建築をまた作りたいですね。以前小学校をやらせてもらったんですが、すごく面白かった。集団で時間を過ごす場所というのは、絶えず興味がある建築のひとつです。
それから、商業建築にも興味がありますね。バーやレストランなど、最近はあまりやっていないのでまたやりたいですね。今ちょうど、渋谷に新しくできる映画館を作っていて、それも面白いです。

たくさんの人が利用する施設ですね。

ええ。映画館の1階部分はバーになっているんです。そこは所有感覚がないようになればいいなと思っているんです。通常、ほとんどの建築は誰かのものですから、その人の思い入れだとかカラーが出てくるんですね。でもここは誰のものでもない空間になったらいいと思うんです。クライアントのものでもなく、そこに来る誰かのものでもない、そうするとすごく自由な空間になる気がします。それが最終的に、社会全体の持ち物になっていけばいいですね。

完成を楽しみにしています。今日はありがとうございました。

コンテンツトップへ戻る

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社ニコン 映像事業部
株式会社ニコン イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.